

南国
イチャラブ
にゅ〜ビーチ

ミルク 学園 SS

小説 神崎美宙
挿絵 FCT

立ち読み版





登場人物紹介

Characters

ほうおういんとう か 鳳凰院桃華

私立鳳凰院学園の理事長の孫娘にして生徒会長。生粋のお嬢様で、ちょっとワガママな性格。

なんでわたしが皿洗いななのよ！



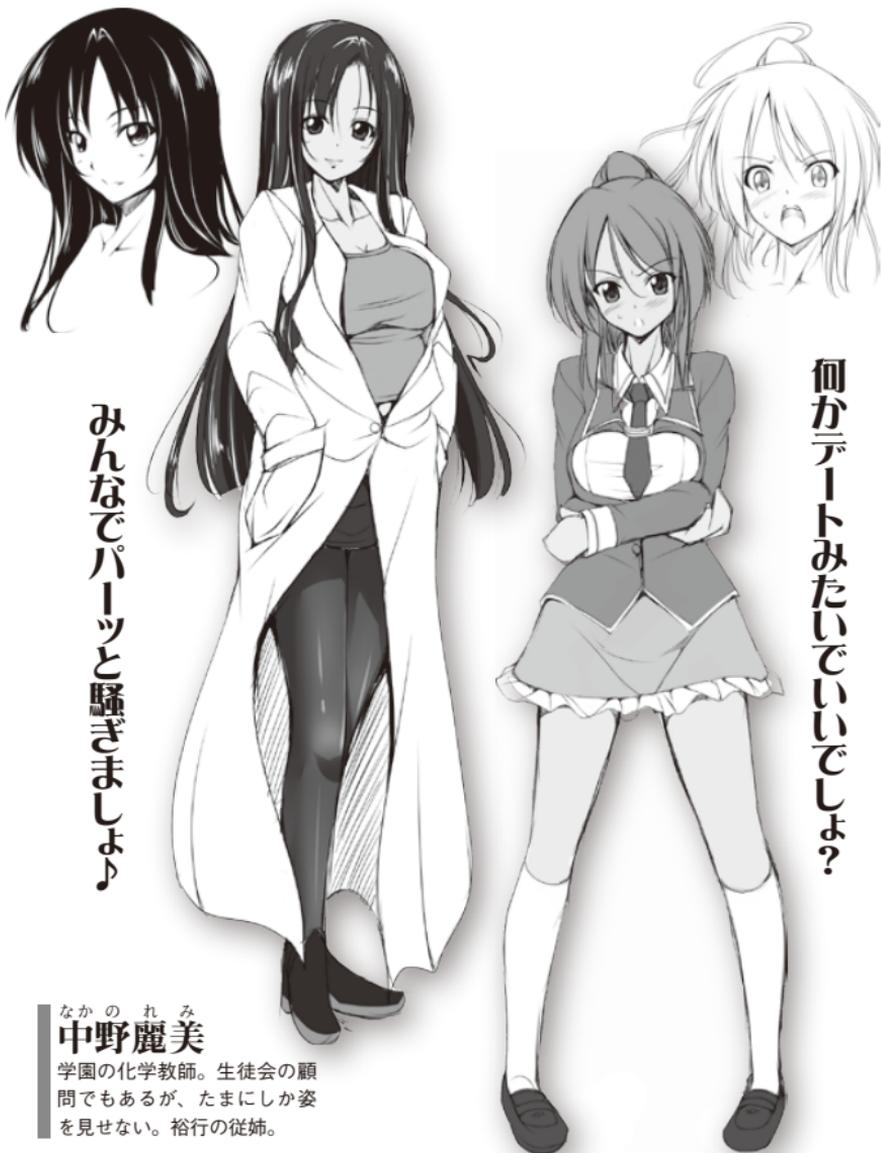
腕を組んでも

よろしいでしょうか……？

なんじょうみやこ 南条美夜子

生徒会副会長を務める令嬢。物腰がやわらかく、お淑やかな才女で、生徒会のまとめ役。





みんなでパーツと騒ぎましょ♪

何かデートみたいでいいでしょ？

なかのれみ
中野麗美

学園の化学教師。生徒会の顧問でもあるが、たまにしか姿を見せない。裕行の従姉。

なかのひろゆき
中野裕行

麗美に勧められ、雑用係として生徒会を手伝う少年。

あいかわ
相川なつき

生徒会書記の元気な少女。気の強い性格から、桃華と対立することもしばしば。裕行とは幼馴染み。

序章	
第一章	真夏のビーチと水着美少女
第二章	お姉さんたちの甘い誘惑
第三章	ドキドキ砂浜エッチ
第四章	イチャラブ尽くしの一日デート
第五章	スペシャルサマー
終章	
	250
	195
	144
	103
	065
	015
	007

「ちよつと、何を勝手に決めてるのよ！ 裕行はわたしと……そ、その……デート、するんだから……」

「独り占めは許さないとばかりに美夜子も桃華も腕を放そうとしない。

「わ、分かりましたから……みんなで一緒に行きましょうよ……」

結局、夕暮れのビーチのど真ん中で痴話喧嘩は続き、美少女たちに囲まれる少年を見つめながら女教師は肩をすくめる。

「あらあら、みんな元氣ね……まあ私も行くけどね」

「あれ……従姉さんに、美夜子さん？ どうしたんですか……」

みんな海水浴場の近くにあるお土産売り場などを散策してから、ホテルのレストランで夕食を取って部屋に戻ると、もう結構遅い時間だった。

今日は疲れたし明日も朝からバイトなので、もう寝ようとしていると部屋のチャイムが鳴る。

ドアを開けると、そこにいたのはホテルの浴衣を着た従姉と年上の美少女。

「いやね、ここ温泉もあるみたいだし、ヒロちゃんを誘ってあげようかなって来たら、ばつたり美夜子と会っちゃったの」

そう言っただけ従姉は美夜子に視線を向ける。

「わたくしは……その、裕行さんと……一緒に寝たくて……」

淑女は恥ずかしそうにモジモジしながら上目遣いに見つめてきた。宝石のように大きく綺麗でエキゾチックな瞳に吸い込まれそうになり、胸がドキドキと高鳴る。

「そう、だったんですか……えっと、桃華さんやなつきさんは……？」

「お二人はもう寝てるみたいです。お疲れのようでしたし……」

どうやら二人は少年と夜を過ごそうとこつそりやってきて、鉢合わせしてしまつたらしい。桃華やなつきだとすぐに睨みあいが始まるので、こうやって二人並んで部屋に来るなんてことはないだろう。

「じゃあせっかくだし、三人で温泉に行きましようよ」

「でもこのホテルには混浴はありませんし……裕行さんと別々だなんて、何だかさみしいです……」

もう部屋のシャワーで汗は流したが、温泉もいいかなと思つていた。ただ混浴がないと聞いて内心がっかりしてしまう。

そんな従弟の考えていることを察したららしい麗美はニヤツと悪戯っぽく微笑む。

「ふふ、大丈夫……混浴はないけど、家族風呂があるらしいわよ。そっちの方が色々楽しめると思うわよ、色々ね……」

色々、の部分をやけに強調しながら従姉は楽しそうに笑う。

確かに家族風呂なら誰かに見られる心配もなく身内だけでゆっくりできる。二人と温泉に入って、それから——と自然に妄想が膨らんだ。

「じゃ、じゃあ……せつかくだし……」

少年が視線を向けると、美夜子もブラウンの髪を揺らして頷く。

「はい、そういうことでしたら、ご一緒させていただきます……」

少し頬を赤らめながらも美少女はスツと隣に身体を寄せてくると、腕に自分の腕を絡めて抱きついてきた。そうすると当然のように彼女の大きすぎる乳房が二の腕に当たり、つい意識は浴衣の胸元から深い谷間を覗かせている爆乳に惹き寄せられる。

おっとりとした性格のせいか、この年上の美少女は自分のグラマーな身体がどれだけ魅力的かということをあまり自覚していない。無防備すぎてドキッとさせられることが多いが、その純粋で真っ直ぐな好意を感じ自然と胸が甘酸っぱい感情で満たされていく。

「うふふ……裕行さんと一緒に温泉……すごく楽しみです……お昼は忙しくて裕行さんとゆっくりお話できませんでしたから……」

美夜子は蜂蜜のように甘くとろけるような笑顔を浮かべて微笑んだ。

普段から笑顔を絶やさず誰にでも優しく上品な彼女だが、少年にだけ見せる特別でとびきりのスマイルである。

「あらあら、早速腕なんか組んじゃって、見せつけてくれるわね。とつてもお似合い

よ、二人とも」

「い、いや、そういうわけじゃ……」

従姉にからかわれて顔を赤くする少年とは反対に、美夜子は嬉しそうに二の腕を抱く腕に力を込めて見上げてきた。

「本当ですか？　ありがとうございます、先生……うふ、裕行さん、わたくしたちお似合いですって……どうしましょう……」

柔らかい爆乳をグイグイと押しつけ、浴衣が張りつき十代とは思えない豊満なラインを描くヒップをくねらせながら美少女は照れている。

「あ、ああ、そうね……まったく、美夜子には敵わないわね……とりあえず、フロントに行つて受け付けしてきましょ」

マイペースな彼女の反応に麗美は苦笑いを浮かべて肩をすくめていたが、すぐに空いている方の腕を取ると歩き出した。

「ふふ、ウチの可愛いヒロちゃんを簡単に渡さないわよ」

「わわっ！　従姉さん、引つ張らないでよっ……」

突然に腕を引つ張られて足がもつれて転びそうになっていると、反対から美夜子が支えてくれる。

「大丈夫ですか、裕行さん？　さあ、早く行きましょ」

転ばずに済んだわけだが、淑女も笑顔で歩き出し両腕を引っ張られた。まるでハンターに捕まった獲物になったような気もしたが、これから起こるであろう甘い時間を想像して胸は高鳴る。

ホテルの受付で鍵をもらい家族風呂へとやってきた。

当然ながら脱衣所は一つしかないので裕行は先に服を脱いで浴室へと入る。もう裸を見たこともあるしエッチだっただけ、着替えを見られるのは恥ずかしいというのが乙女心らしい。

とりあえず一人で温泉に浸かりながら二人が来るのを待つことにした。湯船は四、五人で入れるような自宅にあるものよりかなり大きめで、床は石張りになっていて大きな窓から夜空を眺めることもできる。

「お待たせ、ヒロちゃん。湯加減はどう〜？」

落ち着いた雰囲気の内風呂を堪能していると入り口のドアが開き、タオルを身体に巻いた麗美と美夜子が入ってきた。

「大浴場の方も綺麗でしたけど、家族風呂も素敵ですね……」

二人は片手でタオルを押さえながら反対の手で桶を持ち、軽くお湯を肩から流すと湯船の中に入る。そんな何気ない仕草すら色っぽくて、心臓の鼓動がドキドキと大きくなった。

そして当然のように少年の両隣に腰を下ろす美女と美少女。お湯が揺らめきタオルから覗く胸の谷間がさらに扇情的に映り、少年の視線を惹きつける。

「はぁ、いいお湯ね。疲れが抜けていく気がするわね」

「ふふ、そうですね……今日はお疲れ様でした……」

両足を伸ばしてのんびりとくつろいでいる麗美に対して、美夜子は足を閉じて女の子座りをしてぴたりと身体を寄せてきた。

「ほ、本当に……いいお湯ですね……明日に備えて、疲れを取らないと……」

肩と肩が触れあう距離に二人が迫ってきた、急に身体中が火照ってくる。そのおかげで顔が赤くなるのを感じ、気分を紛らわせようと話を合わせた。

しかし声が上がらず、動揺しているのはバレバレである。そんな少年の様子に気づいたらしい麗美がワザとらしく肩に両手を置いてしなを作り見つめてきた。

「ヒロちゃんが疲れたのは自分のせいじゃないかな」

「え、いや……それは……」

「シャワー浴びてきたとか、ミルク飲んだだけとか言ってたけど……実は桃華とエッチしてたんでしょ？ 休憩から戻ってきた桃華のご機嫌つぷりを見たらすぐにピーンときたわよ」

いきなり凶星を突かれた少年は言葉を詰まらせる。やはり従姉は何もかもお見通しだっ

たらしい。

「そうだったんですか、もう桃華さんったら自分だけ……」

恋敵がこつそり少年とエッチをしていたことを知った美夜子は拗ねたように可愛く頬を膨らませている。

「別に怒ってるわけじゃないのよ。ただ、桃華にだけおいしい思いさせるのはどうかなって思っただけ……ね、美夜子？」

「はい、わたくしも裕行さんに可愛がっていただきたいです……」

女教師が水を向けるとおっとり少女も力強く頷いた。

「あ、あの……」

その迫力に圧されて思わず仰け反っていると、美女はペロツと舌で唇を舐めてから口を開く。

「ふふ、ヒロちゃんの大好きなパイズリをしてあげる……こっちに座って……」

言われた通り浴槽の縁に腰を下ろした少年の股間に、麗美がタオルを解いて晒した生おっぱいを押しつけてくる。お湯で濡れた巨乳は温かくて、すでにギンギンに勃起したペニス挟み込まれた瞬間に下半身に甘い痺れが広がった。

「先生ったら、わたくしも裕行さんを気持ちよくしてあげたいです……」

さらにその様子を見た美少女まで自分の爆乳を抱え上げ、女教師に負けじと股間へ身体



を割り込ませる。サイズで勝る美夜子のおっぱいは麗美の乳房を押し退けるようにしてペニスを覆い尽くし、もちもちとした柔らかい感触に包まれた。

「う、うわっ……すぐ、すごいっ……」

二人分の幸せな乳圧に胸は躍り、美女と美少女が自分の股間の上で胸を押しつけあっている光景に思わず見とれてしまう。

「あん、ヒロちゃんのオチ○チン……とつても熱くなってるう……」

麗美は硬くいきり勃つペニスの形を確かめるように、左右から挟んでいる乳房をぐいぐいと動かし始めた。

むにゅん！ むにゅ、むちっ……むにゅう、むにゅんっ!!

見事なサイズを誇る二人のおっぱいが激しく擦りつけられる。なめらかな乳肌の感触と柔らかい弾力が若い男根を刺激し、少年はたちまちダブルパイズリの快感に酔いしれてしまっていた。

「あん、美夜子のおっぱいと擦れちゃって……胸が張ってきちゃった……」

「はあはあ……わたくしも、先っぽが痺れてきて……なんだか、気持ちよくなってきました……」

しばらくすると美女たちの息遣いは荒くなってくる。それでも熱っぽい吐息をペニスに吹きかけながら乳房を上下に揺らし続け、大胆に弾む二人の巨乳と爆乳は張りを増して肉

棒を包む乳圧が強くなってきた。

「ひ、裕行さん……はあ、んっ……ミルクが、ミルクが出てしまいますっ……」

重たげに揺らしていた乳房をギュッとペニスに押しつけた瞬間に乳首から白いミルクが滲み、勢いよく溢れてくる。次々に搾り出される大量の生温かいミルクは、たちまち麗美の乳房もその間に挟まれたペニスも濡らしていった。

「はあ、んああっ……美夜子ったら、そんなにおっぱい押しつけたら……私も、ミルク出ちゃうじゃないっ……」

大人の女性らしく余裕の表情を浮かべていた女教師も頬を赤らめ、上体を仰げ反らせるようにして寄せ上げた乳房を突き出してくる。

ぴゅるっ！　ぴゅっ……ぴゅ、ふしゅっ……ぴゅうううううううううううう！！

麗美の巨乳からも甘い香りのするミルクが溢れ、二人のおっぱいはあっという間にミルクまみれになり、ぬるぬるとペニスに絡みついてきた。温かい肉まんに包まれているかのようなパイズリのおかげで、むくむくと射精欲が沸きあがってくる。

「はうっ……き、気持ちよすぎます……」

下半身に力を込めて必死に快感に耐えている少年の様子を見て、美女たちは嬉しそうに声を弾ませた。

「ふふ、私のおっぱい……気持ちいいでしょう？」

「う、うあ……なつきさん、そんなに強く擦られたら……出ちゃいます……」

下半身に力を込めたせいで膝が震え、声も上ずってしまふ。

「だったら、んっ……いつでも、出していいから……」

なつきは肘を張って乳房を左右から擦りつけながら熱っぽい吐息を漏らしていた。

大きく膨らんだ亀頭はミルクと我慢汁まみれになり、胸の谷間から突き出したり埋もれたりしながらグチュグチュと淫質な水音を立てている。

（こ、こんなの気持ちよすぎるっ……）

裕行が知っているおっぱいの中ではサイズ的には一番小さいが、それでも十分に巨乳と呼べる幼馴染みのおっぱい。肌の張りや弾力の強さが素晴らしくてペニスを包む乳圧は極上の快感を少しでも長く味わっていたかった。

「はあ……あつ、ンンッ……ヒロ君のオチ○チン……アタシのおっぱいの中で震えて、すっごく熱くなってるうっ……」

ミルクで濡れた心地いい乳肉に挟み込まれたペニスには血管を浮かび上げさせ、快感に喘ぐように脈動する。そう長く我慢できないと感じつつ、必死に下半身に力を込めて射精衝動を抑え込んだ。

それなのになつきは身を乗り出すように上半身を反らし、これでもかとおっぱいを擦りつけてくる。限界寸前の逸物を包む乳圧がさらに強くなった。

「はっ、あ、んんっ……もう、遠慮しなくていいからあ……アタシのおっぱいにたくさん出してよお……」

顔を赤らめ、声を弾ませ、息を乱れさせながら幼馴染みが射精を催促してくる。

肉体的な快感に加えて美少女が水着から露出した生おっぱいでパイズリをしている光景に、もう興奮は最高潮に達していた。

「あ、うっ……ごめんさい、もうっ……出るっ……」

我慢する理由もすぐに射精してはかつこ悪いというちっぽけなプライドである。そんなものはなつきのミルクパイズリの前ではあまりに無力だった。

沸き上がる射精欲を抑えきれず、欲望に身を委ねた瞬間に視界が白く弾ける。

ビュルッ！ ビュブブッ、ドビュッ！ ビュブブッ、ドビュウウウッ！！

「あ、ああんっ！ 熱いっ……アタシの胸の中で出てるっ……」

ちようどなつきの乳房がペニスを覆った時に射精が始まった。バイト中からずつと生殺し状態で溜まりに溜まっていた精液が一気に彼女の胸の中に吐き出されていく。

大量の白濁液は乳房をドロドロに汚し、蒸れた臭いを漂わせる。

「すごい……こんなにたくさん……熱いのが、出てるう……」

同時に幼馴染みのおっぱいもさらにミルクを噴き出し、うっとりとした表情を浮かべながら射精を受け止めていた。

「うう……も、もう……出ない……」

野外だというのにパイズリで思いつき搾り取られてしまい、その快感のあまり足に力が入らなくなってしまう。

立っているのがやつとの状態なのに逸物は力強く脈動し、これでもかと吐精を繰り返していたが、やがてその勢いもおさまった。

「はあ、ンっ……いっぱい出たね……ふふ、綺麗にしてあげる……」

それを見てなつきは乳挟みからペニスを解放すると、今度はぱくりと亀頭を咥え込んでしゃぶりついてくる。まるでストローで吸うようにして尿道に残った精液を飲み干し、竿の部分にも舌を這わせて綺麗にしていく。

「あ、なつきさんっ……今、舐められたら……はうっ！」

絶頂直後で敏感になっている亀頭を舐められ、思わず腰がくだけそうになった。何とか踏ん張ろうとしたが、射精後の気だるさに全身が支配されており、そのまま砂浜の上へたり込んでしまう。

「わっ……ちよつと、大丈夫？ そんなに気持ちよかったの……？」

驚いたように美少女も四つん這いになって覆いかぶさってくる。赤いポニーテールが揺れ、ミルクと精液で白く汚れた巨乳が弾む。

「すぐく、よかったですよ……」

「……本当？ 喜んでもらえて、嬉しいな……」

素直に頷くと、なつきは頬を赤らめながら嬉しそうに微笑んだ。その笑顔を見てみるとこちらまで温かい気持ちになってくるが、股間は火照ったままで射精したばかりだというのに逸物は硬くいきり勃っている。

当然のように少女もそのことにすぐ気づいた。

「あつ、もう大きくなってる……まだまだ元氣だね……」

「うう……これは……だって、なつきさんが舐めたりするから……」

あれだけ射精しまくったのに節操なく勃起するペニス。これだけは自分の意思ではどうしようもできなくて、裕行は恥ずかしくなって視線を逸らした。

「別に恥ずかしがらなくてもいいじゃない……だってヒロ君はもつとアタシとエッチなことがしたいってことでしょ？ だから嬉しいもん……」

瞳を潤ませたなつきは片手で身体を支えながら反対の手を少年の股間へと伸ばし、大きくなった逸物をそつと握り締める。そしてゆつくりと腕を上下に動かし、その形を確かめるかのように優しく手のひらで扱ってきた。

「ねえ、ヒロ君……エッチ、しょ……」

女豹のような体勢になっているせいで下を向いたおっぱいからミルクが滴り、甘えた表情で見下ろしてくる幼馴染み。こんな風に可愛くおねだりされて、理性なんて保っていら

れるはずがない。

少年が無言でコクコクと頷くと、なつきはペニスから手を離して自分の股間へと伸ばした。

「外でしちゃうなんて……ドキドキしちゃうね……」

少し辺りを確認してから少女は股間に跨り、水着のクロッチ部に指を引つ掛けて横にずらした。露わになった恥丘に生えそろうた陰毛は綺麗に逆三角形に整えられていて、思わず視線が吸い寄せられる。

「それじゃあ、挿入れるね……アタシがしてあげるから、ヒロ君はジツとして……」

なつきはペニスの根元を持って固定すると、先端を自分のワレメへと導いた。

ヌチャツ——。淫らな水音が鳴り綺麗に舐めてもらった亀頭が大淫唇と密着する。パイズリをしている時から感じていたのか、彼女の膣口はもうびしょ濡れ状態だ。

「なつきさん……濡れてる……」

「もお……恥ずかしいから言わないでよ……」

照れたようにはにかみながらも、なつきは両足で踏ん張り位置を調整するとそのまま腰を下ろしてくる。たつぷりと蜜を分泌している膣口にペニスの先端が呑み込まれ、温かい粘膜に包み込まれた。

（パイズリしながらなつきさんも感じてたんだ……）

美少女が乳奉仕をしながら気持ちよくなっていたことを知り、快感を共有していたことが嬉しくて自然と胸が熱くなってくる。

「ひゃんっ……ん、あああっ……」

一番太いカリの部分がワレメの中へと埋まっていくと、なつきは赤毛のポニーテールを揺らして大きく喘ぐ。人気のない夕暮れ時の海岸に甘い声が響くが、波の音でかき消されてしまう。

「う、うあ……なつきさん、中、熱くて……締めつけが……」

ズブズブとペニスが奥へと進んでいくにつれて柔らかい膣壁がキュッキュツと絡みついてくる。裕行がセックスをした相手の中で、おそらく彼女の膣が一番狭くて、締めつけが強い。

「はっ、ンンっ……ヒロ君のも、すっごく熱いよ……」

荒い呼吸を繰り返して砂浜の上についた両腕を震わせながらも、なつきはじわじわと腰を沈めていく。食いちぎらばかりにしゃぶりついてくる膣壁とペニスが擦れてしまい、気を抜くとその刺激だけですぐにも射精してしまいそうだった。

それはさすがに情けないと下半身に力を込めて堪えていたら、彼女の引き締まったヒップがべたんと股間と密着する。

「くっ、ぜ、全部……挿入しましたね……」

「あ、ひいん……う、うん……アタシの中が、いっぱいになってる……」

先端が子宮口に達した瞬間に美乳からびゅつとミルクが噴き出した。騎乗位で貫かれた少女は熱っぽい吐息を漏らしながら肩を大きく上下させている。

この体位は特に深く膣にペニスが突き刺さるので、彼女も挿入しただけで相当感じているようだ。

「ご、ごめんね……ちよつと待ってね……すぐにもつと気持ちよくしてあげるから……」
そう言いながらもなつきは自分の上半身すら支えられなくなり、少年の身体の上に覆いかぶさるように倒れこんだまま動けなくなっている。

「大丈夫ですか……無理しなくても……」

「ううん、無理じゃないよ……アタシも、ヒロ君のこと……もつと感じたいから……」
裕行が心配して声をかけると、少女は笑顔を浮かべながら首を横に振った。

そして両手を少年の胸板に添えて何とか身体を起こし、バランスを取りながらゆつくりと根元まで啜え込んでいたペニスを吐き出すように腰を揺らし始める。

ズップツッ！ ヌップツッ！ ズップ、ヌップツッ！！

甘い摩擦快感を味わうとともに、少女のピチピチとしたヒップの感触が股間の上から離れていった。

「はうっ……いきなり動かれたら、出ちゃいそうになりましたよ……」

挿入しているだけでも十分に気持ちよかったのに、蜜で熱く濡れた膣肉で扱かれ思わず情けない声を出してしまふ。

「んっ……出そうになつたら、いつでも……ヒロ君の好きな時に出していいから……」

何かとお姉さん風を吹かすが、実は優しいなつきは、きつと本当に裕行がこのまま射精しても文句を言つたりしないだろう。それどころか自分の腰使いで感じてくれたと喜ぶかもしれない。

しかしさっきのパイズリとは違い、今はセックスをしているのだ。一人で先に果ててしまつては情けないし、彼女にもいっぱい感じてもらいたい。

「それじゃあ、ダメですよ……なつきさんも気持ちよくならないと……」

「ふふ、ヒロ君つたら……本当に優しいんだからっ……ありがとうね……でも、アタシは今でもすっごく気持ちいいよ……」

肩をひそめつつ笑顔を浮かべながら、ゆるゆると腰を上下に揺らし続ける。

狭い膣肉の中をペニスが出たり挿入つたりを繰り返す度に股間が痺れるような甘い快感が広がっていく。

「あ、ううっ……き、気持ちよくて……僕も、腰が……」

幼馴染みの腰使いにつられて少年も自然と腰が動き出した。粘膜同士がさらに強く擦れあい、下から突き上げられた少女の身体が大きく跳ねる。

「きゃんっ！ あ、ふぁ……ダ、ダメだつてば……あん、アタシが……気持ちよくしてあげるって言ったのに……」

お姉さんぶろうとしていたなつきだったが、すぐにそんなことをしている余裕はなくなり、倒れないように必死に両手で身体を支えながら身悶えしていた。

「ん、ンンっ……はあん、は、激しいっ……お、奥にズンズンって、当たってるっ！」

腰の動きに合わせて彼女のトレードマークのポニーテールが揺れ、甘ったるい声が誰もいない海岸に響く。

そんな彼女の乱れた姿をもつと見たくて、無意識のうちに腰の動きは大きくなる。

「はあっ、あくっ……なつきさんの中、キツすぎて……すぐ出そうですっ……」

一度動き出すともう歯止めはきかなくなり、両手で彼女の細く括くれた腰を捕まえて、いきり勃つペニスで膣奥を突きまくった。

ズッチャツ！ ズッチャツ！ ズチャズチュツ！！

「ひいあんっ……う、うんっ……アタシも、き、気持ちいいよっ……ヒロ君でいっばいになつてえ、すっごく感じちやうのおっ……」

激しく性器が擦れるせいで、溶けてひとつになつてしまいそうな感覚に陥るほど気持ちよく、目の前でミルクを溢れさせながら大胆に揺れる美少女の美乳が興奮を煽る。

おかげで先ほど射精したばかりだというのに、またしても股間の奥に熱いものを感じて

しまう。それなのに逸物をこれでもかと膣奥にねじ込み続ける。

「ああっ、なつきさんっ……僕、もうっ……」

意識し始めるとあっと言う間に全身が快感に支配され、もう頭の中は射精のことではないだった。

「……あひい、ああんっ！ い、いいよっ……ふあ、ああっ……アタシもイキそうだから、このまま一緒にっ……お願いっ……」

なつきは少年の両手を握り締めたまま、激しく腰を振るう。小ぶりの尻肉が何度も何度も股間をタップし、肌のぶつかる乾いた音と勃起ペニスが愛液で濡れた膣内をかき回す水音が重なって響く。

そして元から狭い膣壁がさらにキツく締めつけてきて、限界寸前の逸物と淫摩擦を繰り返した。粘膜同士が熱を発し、股間が蕩けるかと思うほど気持ちいい。

「うううっ！ 出る、出ますっ……あうああああっ!!」

無意識のうちにもっと快感を貪ろうと腰を突き上げてしまい、理性は吹き飛び腰の動きが止まらない。

急速に大きくなる射精衝動に、もはや抗う術すべはなかった。

「あん！ あんっ！ お、奥に……あた、当たってるのおっ！ 気持ちよすぎて、頭が変になっっちゃううううんっ!!」



「す、すみません……こんなに濡らしてしまつて……でも胸で擦っていたら……ど、どうしても……あぁんっ……」

ホルスタイン柄の衣装を身にまとっていることもあり、彼女のおっぱいはまさにミルクタンクと呼ぶに相応しい勢いで射乳を繰り返している。

美夜子は股間をミルクまみれにしてしまい申し訳なさそうにしているが、少年は大迫力のミルクパイズリに視線を釘付けにされていた。

「くうっ……謝らないでください……むしろ、その……とつてもエロいですから……」

そもそも胸奉仕で股間をミルクまみれにされるのだから、今回が初めてというわけではなくそこまで気にならない。それに温かいし乳肌のすべりはよくなるし、パイズリの快感が増すので大歓迎だ。

「そうですか……？ ではこのまま続けさせていただきますね……あ、んっ……全然、止まらなくて……は、恥ずかしいです……」

これだけのサイズを誇る爆乳を揺らし続けるのは大変らしく、少女は額に汗を滲ませながら息を弾ませている。

そうしている間も美夜子の爆乳は胸の中で快感に喘ぐペニスと擦れる度に、薄ピンク色の乳首からびゆるびゆると止め処なくミルクを噴き出していた。

「美夜子さんのおっぱい、ミルクまみれで……めちゃくちゃ気持ちいいですっ……」

牛コスプレでいつも以上に乳房を強調する彼女のパイズリは想像通り、いや想像以上に気持ちよくて下半身にじわじわと快感が広がってくる。おかげで逸物は小刻みに震えながら先汁を漏らし、乳肉の谷間をさらに濡らした。

「んっ、んふっ……嬉しい、ですっ……遠慮せずに、気持ちよくなってください……」

少年が感じているのを見て嬉しくなったのか、美夜子はますます強く乳房を擦りつけてくる。そうすれば当然のように乳頭からは白い乳液が溢れ、甘い香りを漂わせて牡の本能を刺激した。

しかも少女は射精を促すようにペニスを自慢の爆乳でこねながら、首をかがめてその谷間から顔を覗かせている亀頭に舌を這わせてくる。敏感な部分をザラつく舌尖でなぞられ、心地いい乳圧と混ざりあってさらに興奮をかき立てられてしまう。

「はうっ！ み、美夜子さんっ……それ、ヤバイですっ！」

竿の部分は柔らかいミルクおっぱいに包まれ、先端は唾液をまぶすように舌肉で舐め回されて思わず射精してしまいそうなほどの快感が股間へと流れ込んできた。

フェラとパイズリの同時奉仕で一気に絶頂を意識させられてしまい、堪らずに腰が浮き上がる。

「ぢゅ、ぢゅぶぶっ……はむ、ンちゅ、出そうですか？ でしたら、このまま……わたくしのお口の中へ、どうぞ……んむうっ……」

腰をビクつかせる少年の様子から限界に近いことを悟ったのか、竿を乳房で扱きながらおずおずと口を開いて舌を垂らした。

普段は上品でおっとりとしている美夜子が自分の排泄液を口で受け止めようとしてくれている。嫌がるどころか心待ちにしているかのように上目遣いに見つめてくる彼女の姿に、男心はくすぐられっ放しで興奮は高まるばかりだった。

「はあ、はあ……裕行さあん……いつでも、出していいですからっ……我慢なんてしないでください、ちゅ、ちゅうううっ！」

大量の我慢汁を吐き出す小穴を舌先で突つつきながら、ミルクおっぱいで逸物を左右からギョツと締めつけてくる。蕩けるように柔らかい乳房がみっちりと隙間なくペニスに絡みつき、そのまま精液を搾り取り取られてしまいそうなパイズリ独特の快感に少年は翻弄されっ放しだった。

「あ、ああっ！ 出るっ、本当に出ちゃいますっ!!」

もう何も考えられなくなり、ミルクおっぱいとフェラの気持ちよさを味わうことに全神経が集中する。幸せな乳圧とミルクの温もりにザラっとした舌肉の感触が混ざりあい、同時に責め立てられた勃起ペニスは堪らず悲鳴を上げた。

我慢は限界に達し、尿道の奥から熱い衝動が湧き上がってくる。その凄まじい快感に全身は支配され、無意識のうちに腰を突き出して逸物を彼女の舌先に押しつけていた。

精後の脱力感もすごく、少年は肩で息をしている。

「……ふふ、たくさん出ましたね……気持ちよかったですか？」

「それはもう……めちゃくちゃよかったです……」

吐き出された精液を全て飲み干すと、美夜子は愛情たっぷりのお掃除フェラでペニスだけでなく、ミルクまみれになった股間や太ももも綺麗にしてくれた。

「よかった……喜んでいただけたなら、とっても嬉しいです……」

まるで親に褒められた子供のように幸せそうに微笑む彼女が可愛くて、無性に愛しさが増し胸を満たしていく。年上の優しいお姉さん風の美少女なのに、こういう無邪気な表情を見せられると男心がくすぐられて守ってあげたくなる。

そんな感情の高ぶりにつられて股間の逸物は再び硬度を取り戻し、彼女の手の中でヒクついていた。

「まあ、裕行さんだったら……今、出したばかりですのに……」

「す、すみません……生理現象というか、その……」

「いえ、謝らないでください……わたくしも、その……もつとエッチなこと、して欲しいですから……今度は、わたくしの中に……」

節操のないペニスを見ても少女は咎めるどころか、照れたように頬を染めている。そしてうつとりとした表情でこちらを見上げてきた。

「み、美夜子さんっ……」

そんな潤んだ瞳で見つめられては、少年の理性など一瞬で吹き飛ばれてしまう。

しかもホルスタインビキニ姿が普段の清楚な彼女のイメージとギャップがありすぎて、余計に胸が高鳴る。

「ああ、裕行さん……す、好きです……抱いてくださいっ……」

興奮していたのは美夜子も同じらしく、待ちきれないとばかりに抱きついてきた。

突然だったのでその勢いを受け止めきれず、バランスを崩した二人は折り重なるようにベッドの上に倒れ込む。

「きゃっ……」

まるで押し倒したような体勢になってしまったが、少女は潤んだ瞳で見上げてきた。

牛コスをした美少女がおっぱいをむき出しにした挑発的な格好でベッドに横たわっている。そんな光景を見せられて興奮しないわけがなかった。

「み、美夜子さんっ……僕、もうっ……」

「はい……わたくしも、もう待ちきれないんです……」

可愛らしく急かしてくる美夜子をこれ以上待たせまいと少年もすぐさま頷きそうになるが、ふと脳裏にあることがよぎる。

せつかくなのだからさつきやっていった牛の物真似でおねだりしてもらいたい。

(すぐく恥ずかしがってたし、やってくれるかな……でも、見たいなあ……)

せっかかない雰囲気なのに変なお願いをして、ムードを壊してしまつたらどうしようかと心配になる。しかし可愛い美夜子を見たいという欲求には勝てなかつた。

「あの、さっきのやつ……またお願いしてもいいですか？」

「さっきのやつ、ですか……？」

やはりストリートには言えず遠まわしにお願いしてみたが、少女には伝わらなかつたらしく不思議そうに首を傾げている。

「えっと……牛の真似で、お願いしてもらえたらなって……」

「あ、あれですか……あれは、もう……うう……」

裕行が何を求めているのか知つた美夜子はカッと頬を赤く染めた。やはりあれは相当恥ずかしかつたらしく、普段なら少年が頼み事をするとは大体笑顔で引き受けてくれる優しい彼女も困つたように視線を泳がせている。

「無理にとりわけではなくて……変なこと、言つてすみません……」

「い、いえ……裕行さんがどうしてもおっしゃるなら……いいですけど……でも、笑わないでくださいね……」

まさか本当にやってくれるとは思つていなかったが、美夜子はモジモジと身体をよじりながらも確かに頷いた。

そしてこちらを見つめながら意を決したようにそつと口を開く。

「……わたくし、裕行さんと……モ、モオ……と、エッチしたいです……モオ……あ
あ、恥ずかしいです！」

美夜子は言い終わると同時に両手で顔を覆った。おっとりとしている彼女がこんなに取り乱しているのは珍しく、そんな姿も可愛くて愛おしくなる。

顔どころか首筋や耳の辺りまで真っ赤にして恥ずかしがっているが、牛さんおねだりの破壊力は抜群だった。再び硬くなり始めていたペニスが興奮で一気に完全に勃起し、痛いくらいにギンギンになってしまう。

「僕も美夜子さんとエッチしたいです……すごく可愛かったですよ……」

「もう、裕行さんたら……とつても恥ずかしかったんですよ……」

少し拗ねたように頬を膨らませる美夜子だったが、すぐに優しい表情を浮かべて首に腕を回して抱きついてくる。

少年もそんな彼女のおねだりに応えるように片手を股間に伸ばし、逸る気持ちを抑えながら勃起した逸物を水着の上からワレメへと押し当てた。

「ひゃんっ……裕行さんの、すごく熱くなっています……」

白黒のナイロン地の上からでも分かるくらいに少女の秘裂は愛液で湿っている。ミルクを搾られ、パイズリをしながら勃起。ペニスをしゃぶっているうちに彼女も興奮していたよ

うだ。

「美夜子さんだつて、びしょ濡れになつてますよ……」

「それは、ああ……い、言わないでください……」

恥ずかしそうに視線を逸らす美夜子だったが、身体の方は完全にセックスの準備OK状態である。

少年は興奮に胸を躍らせながら湿ったクロッチ部を横にずらして、パンパンに膨らんだ亀頭をやや下に向けながら大淫唇に密着させた。

クチュツと湿った音が鳴り、柔らかい女性器粘膜が吸いついてくる。

「いきますよ……」

初体験でもないがいざとなると緊張で口の中が乾燥し、思わず生唾を飲み込みながら声をかけると美夜子は無言で首を縦に振った。

それを確認すると少年はゆつくりと腰を前に突き出していく。

ズチュツ！ ズブ、ズニユウウツ！ ズブズリユウウウウ~~~~ツツ!!

「はあああつ、あ、あふう……んっ……な、中に挿入つてきますっ……」

歓喜の声を漏らしながら美少女は両手で少年の腕を掴んだ。

愛液で濡れた膣壁は優しく逸物を包み込み、相変わらず柔らかい肉ヒダが奥へ奥へと誘うようにしゃぶりついてくる。

「うあ、美夜子さんの中、気持ちよすぎて……腰が勝手に……」

あまりに膣粘膜の感触が心地よくて、敏感なペニスと擦れると股間に甘美な痺れが広がり、肉袋がキュッと引き締められるような感覚に陥った。身体は無意識のうちにその刺激を欲して、挿入したばかりだというのに強く腰を打ちつけてしまう。

「あ、あつ、ああん！ は、激しい、ですつ……んはあ、お腹の奥に、ズンズンッて響いてますつ……」

いきなり膣奥を突き上げられた美夜子は顎を反らして甘い喘ぎ声を上げ、ピストンに合わせて爆乳がお皿の上のプリンのように揺れまくっている。

挿入しただけで射精しそうなほど気持ちいい膣肉を味わいながら、両手は魅惑のおっぱいへと伸びた。

「すごいです、おっぱいがめちゃくちゃ揺れて……エロすぎますつ……」

両手ですくい上げるように美夜子の爆乳を鷲掴みにするが、とても手のひらには収まりきれないおっぱいを揉み回すのはなかなか大変だった。それでも少年が指をいっぱい広げて円を描くように乳肉をこねると、ツンと尖った乳首からミルクがピュッピュッと溢れてくる。

さっきあれほど飲んだのに、飽きなんてこない。裕行は美味しそうなミルクおっぱいを交互にしゃぶり、ミルクを吸いながら腰を突き上げた。

「はぁん、あんっ……胸とアソコをいっぺんにされたら、はうあああつ……」

乳を搾られながら同時に膣奥を責められた美少女は甘ったるい喘ぎ声を漏らす。

白黒の衣装のおかげでミルクを溢れさせている姿がいつもよりさらに扇情的で、自然と乳房を揉む手にも腰の動きにも力が入る。

ズチュッ！ ズチャッ！ ズチュッ！ ズチャッ！

「ひ、裕行さん、そんなに強くしたら……わたくし、感じすぎて……あ、あんっ！」

美夜子の膣肉は奥を突く度に優しくペニスを締めつけ、粘膜が摩擦を起こす快感で股間が痺れ、甘ったるい感覚が広がっていく。

(ああ、ヤバいつ……出そうになってきた……)

挿入してからペースも考えずに肉悦を貪り続けたせいで、思ったよりも早く限界が近づいているのを感じた。

しかし美夜子の温かくて蜜でとろとろになった柔らか膣肉が気持ちよすぎて、自制しようとしても勝手に腰が動いてしまう。当然のように何の芸もない力任せで単純な責めになるわけだが、少女は膣奥を突かれる度に可愛らしく喘いでいる。

「すごいですっ……はぁ、あぁん……気持ちよすぎて、わたくし……ミルクが止まらな
いんですっ……はううんっ……」

しかも大迫力の乳揺れを見せる爆乳からは止め処なくミルクが溢れ、美夜子もかなり感

じているのがすぐに分かった。

牡としての悦びが理性を狂わせ、思考を快感一色に染めていく。おかげで込み上げてくる射精衝動に身体は抗うことができず、ひたすら本能のままに腰を振った。

「ああっ、美夜子さんっ！ ぼ、僕っ、もう出ますっ!!」

「は、はいっ……な、中にくださいっ！ あ、あんっ……最後まで、裕行さんを感じていたいんですっ！」

限界が近いことを告げると、美夜子はブラウンの髪を揺らして何度も頷きながら甘ったるい喘ぎ声を室内に響かせる。

ホルスタイン柄のビキニからはみ出たおっぱいがミルクを溢れさせながら弾み、同柄のタイツをはいた両足も左右に押し広げられて力なく揺れていた。

「はあ、ああああっ……お、奥に届いてっ……はひい、んはあっ……変になってしまいうですううっ……」

大量の愛液でぬかるむ膣肉は小刻みに収縮を始め、まるで離さないと言わんばかりに限界寸前の逸物にしゃぶりついてくる。とろとろの柔らかか肉壁が隙間なくペニス全体に絡みつき淫摩擦を繰り返すせいで、もう射精欲を抑えきれなくなっていた。

「はあっ、イ、イキますよっ……ああ、出るっ！ で、出るうううっ!!」

「ひいあんっ！ き、きてくださいっ！ きゃふう、わたくしも……もうダメですっ、頭

がポーっとなつてえ……裕行さああんっ、あはああああああんっ!!」

何度も力強く子宮口を亀頭でノックされた美夜子はあられない悲鳴を上げながら少年の腕をギュッと掴んで全身を痙攣させる。

彼女がイったのを感じながら思いっきり勃起ペニスを重ね込み果てた。

ドビュ! ドビュ! ビュビュビュッ! ビュルルルウウウウウッ!!

「ひやうううんっ……あ、あは、ああっ……わたくしの中に……熱いのがたくさん、たくさん……出てますう……」

恍惚とした表情を浮かべる美少女の乳房からはミルクが噴き出し、同時に膣口からは粗相をしてしまったかのようにぶしゅつと潮が溢れる。

あの上品で誰にでも優しい美夜子が口を半開きにして、荒い息を繰り返しながら果てている姿に牡の本能は大いに刺激された。色々な脳内物質が分泌され思考は完全にショートし、勃起ペニスは脈動し精液を吐き出しまくる。

(き、気持ちよすぎるっ……射精、止まないいつ……)

驚くほどの量を流し込まれた膣内は瞬く間に白濁液で満たされ、結合部から逆流して溢れてきた。もう二人の股間は互いの体液でドロドロになりびしょ濡れ状態である。

無遠慮に続いていた射精の勢いも衰えてくると今度は反動の気だるさが全身を襲い、思わず覆いかぶさるように彼女の上に倒れこんでしまった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム小説は、はるまの万葉集の万葉集に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!